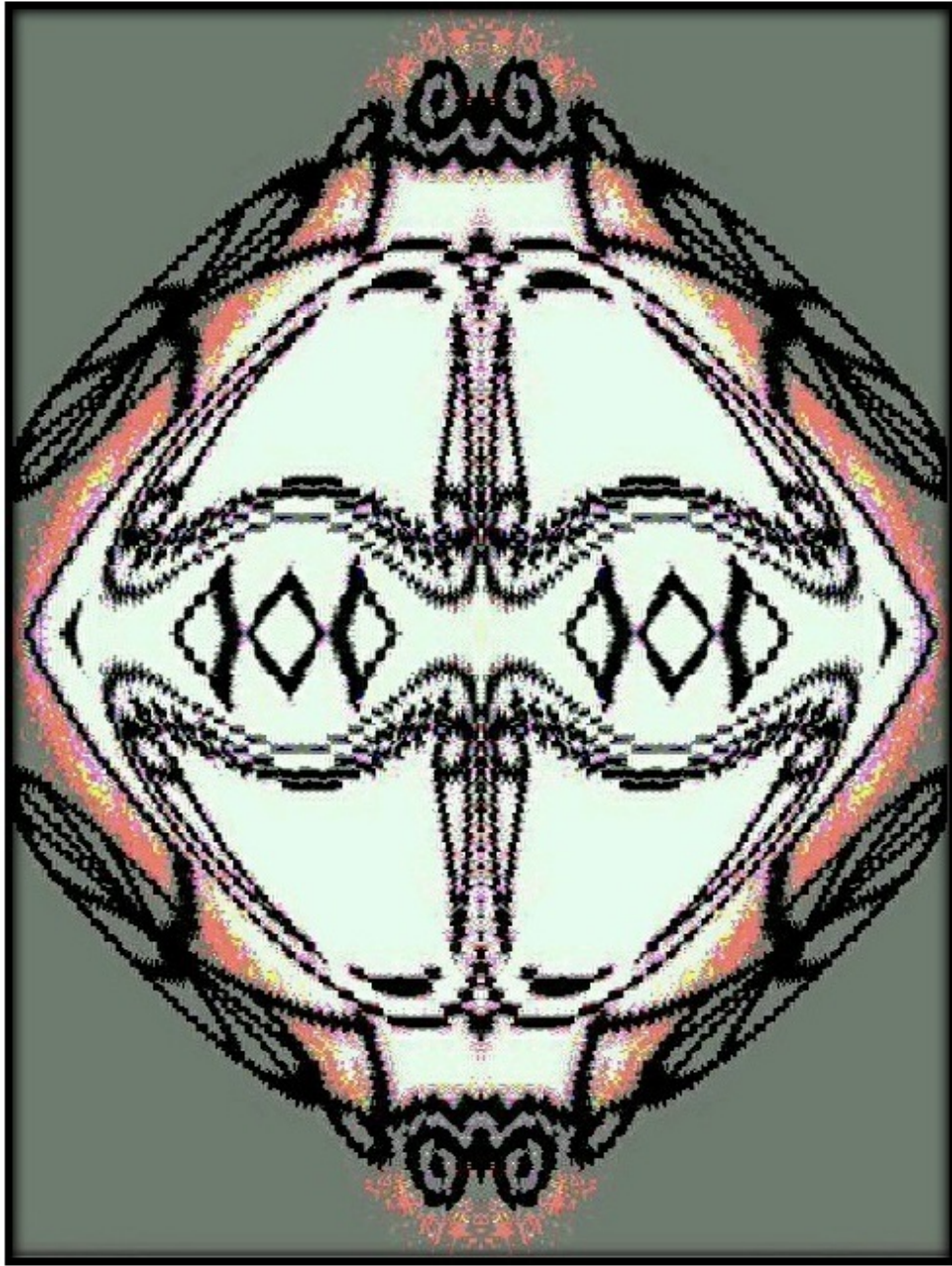


ンの村の掟



mikatuki98

「みんな<ン>がついてるかあ〜！？」

「おーっ！ ついてるぞ〜」

「もちろんよ！」

「では、前列から名乗りたまえ」

「サールン」

「イーヌン」

「ネーコン」

「ウーシン」

「……ウマ」

「なぬ？ おまえ、もう一度名乗ってみろ」

「ウマだ！」

一人だけ<ン>がつかないどころか、伸ばし棒も持ち合わせていない者に村は騒然となった。

「みんなに訊く！ この村の掟は何だ！？」

「名前に伸ばし棒とンがつくことです！」

「そうだ！ しかし今名乗った者には？」

「ありません！」

「そうだ！ ということは？」

「村人ではありません！」

「そうだ！ つまり、おまえはこの村にはいる資格はない。それともウーマンと改名するか？」

「やなこった！」

「……な、ならば早々に出て行きたまえ！」

「ちっ！ あたぼーよ！ ウーマンなんざ女々しい名前で生きれっかつ！」

ウマはカッポカッポとンの村を出て行った。

それからと言うもの、ウマはありとあらゆる世界を旅して見識を広げ、自ら運を切り開き充実した人生を送った。

それからもンの村の村民は相変わらず村人の名前の確認に余念が無かったが、ある日、村の誰かがンの村の村長が名前を名乗って無いことに気が付いた。

「村長！ 村長もわたしたちと同じように名乗って下さい！」

村民が全員一致で村長に詰め寄った。

「なに！？ わたしに名乗れだと？」

「そうです！ わたしたちは未だ一度も村長の名乗りを聞いたことがありません」

「わ・わたしは村長だ！ 名乗らずとも、この村の長だ！」

「いいえ！ 村長だからこそ名乗って欲しいのです」

「……」

「村長！」

「……ラー」

「村長！ 声が小さいです。 後の村民まで聞こえませんか！」

「クッ…… ライオンだ！！！」

「……ラー イオン？ ……フツ」

一瞬シーンとなったが、村民の中から微かに笑い声が漏れて来た。

村長はしまったと思い、再び名乗った。

「いや、ライオンだ！」

「？ ……ライオン？ ……ハッ」

再び村民がざわめいた。

すると村長は居直ったように叫んだ。

「わたしはライオンだ！！！」

「……なんだと！？」

村民にどよめきが起こった。

それもそのはず、掟を作った村長自身の名前にはンは付いていたが、伸ばし棒が無いのだ。

ウマと名乗って村を追い出された者と同じなのだ。

村長の名前を聞いた村民は、いつも自分たちが名前を名乗っていたことがバカバカしく思えた。

そして遂には、村民全員が伸ばし棒を捨てて村を出て行ってしまった。

村にはみんなが捨てた伸ばし棒がそこらじゅうに転がっている。

ライオンと名乗り村で独りぼっちになってしまった元村長は、転がっている伸ばし棒を一本一本拾い集めて檻を作り、自らその中に閉じこもって一生を終えてしまった。

その後、ンを捨てた村民たちはと言うと、それぞれ心の赴くままに旅をして、自分たちの本当の運を探しに行ったとき。 了